

教育委員会協議会議題

平成20年1月24日

1 報告事項

- (1) 平成19年度 全国学力・学習状況調査の本市の分析結果について (資料1 学校教育課)

平成19年度全国学力・学習状況調査 結果の分析と今後の指導について

＜概要版＞

平成20年1月24日

小田原市教育委員会

1 「教科に関する調査」の小田原市の児童・生徒の結果の傾向及び今後の指導について

- ・ 市内の児童・生徒の結果について、全体的な傾向、並びに、設問ごとに全国や県全体の結果と比較し、特徴的な傾向の見られた点について、その傾向と今後の指導のポイントを示した。
- ・ 本調査の実施要領には、「本調査により測定できる学力は特定の一部である」と示されている。

国語

＜全体的な傾向＞

- ・ 国語A(主として知識)、国語B(主として活用)について、小学校、中学校ともに、本市の平均正答率は、全国、神奈川県全体の平均正答率とほぼ同程度である。
- ・ 国語Aについては、相当数の児童・生徒が今回出題された学習内容を概ね理解していると考えられる。
- ・ 全国の傾向と同様に国語Bの平均正答率が低いことから、知識・技能を活用する力に課題がある。

＜今後の指導について＞

- ・ 国語の学習においては、三領域(「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」)及び一事項(言語事項)の学習活動に自ら取り組む子どもを育てていくことを目指す。
 - 毎日の授業において、子どもが目的意識をもって意欲的に学習できるような計画を工夫する。
 - 効果的な評価とともにその評価を活用した不断の授業改善が必要である。

○基礎・基本となる知識・技能の定着(国語A)

- ・ 漢字の読み書きについては、日々の学習の積み重ねとしての成果は現れていると考えられるが、その定着については十分とはいえない。
 - 語句や言葉のきまりについての知識・技能を表現や理解に役立てることに課題が見られたので、使用頻度の高い漢字や語句を入口として、なじみの薄い漢字や語句にも目を向け、実生活に生きる言語の幅を持たせていく。

学校では(主に小学校では)

- ・ 日常生活や他教科等の学習における使用や読書活動の充実のために上の学年に配当されている漢字や学年別漢字配当表以外の常用漢字についても早い段階から児童が読む機会を多くする。
- ・ 読み書きを単に覚えるといった形式的な指導に陥ることなく、その漢字や語句のもつ意味や使い方、関連した熟語なども総合的に学ぶようにする。
- ・ 習った漢字や語句ができるだけ多くの児童の目に触れるように、教室環境を整える。
- ・ 他教科でその漢字や語句が使われたときには意識的に扱ったりするなどの工夫をし、日常生活で使用する事への興味と関心を高めながら、確実な定着を図る。
- ・ 辞書の活用などを通して、漢字や語句の意味との関連を捉え、漢字や語句そのもののもつ意味や使い方を意識して習得するようにする。

教育委員会では

- ・ 漢字や語句、言葉のきまりについての知識・技能を身に付け、日常生活で表現や理解に役立てることへの興味と関心を高めながら確実な定着を図る。

○知識・技能を活用する能力を身に付けること(国語B)

- ・ テキストから受信したものについて論理的な思考により自らの見方や考え方をもち、主体的に表現していくことに関する設問で無解答の児童・生徒が多いという傾向が見られた。

- 国語の授業の様々な場面で「考える」時間を作り、考えたことを発信する場を設けることにより、「受信」—「思考」—「発信」のプロセスを重視した授業へと改善を図る。

学校では

- ・ これらの分析結果をふまえて、校内研究等において、国語の学習指導法を工夫し、改善を図る。
 - 主体的に言語活動に取り組み、学びあって生きて働く言語能力を身に付けることができる。
- ・ 保護者・地域に働きかけ、改善の趣旨が十分に理解され、協力が得られるように努める。

教育委員会では

- ・ 授業の様々な場面で「考える」時間が作られ、考えたことを発信する場が設けられるように、指導法の不断の改善を学校訪問等の機会をとらえて継続的に指導していく。

算数・数学

<全体的な傾向>

- ・ 小学校算数A・B、中学校数学A・Bともに、市の平均正答率は、全国及び県全体の平均正答率とほぼ同程度である。
- ・ 「問題A」（主として知識に関する問題）が概ね良好であると言える。それに対して、全国の傾向と同様に「問題B」の知識・技能を活用する力に課題がある。

<今後の指導について>

○基礎・基本となる知識・技能の定着（算数・数学A）

- ・ 計算については、日々の学習の積み重ねの成果は現れている。
- ・ 乗除先行の理解が十分でないなど定着が十分でない面が見られる。
 - 基礎・基本となる知識・技能のひとつとして計算技能の確実な定着を図る必要がある。

学校では（計算技能の確実な定着を図るために）

- ・ 日々の授業において、児童・生徒が、自ら「どんな既習事項が使えるか。」「なぜそうなのか。」といった問いを持って、計算方法を作り上げていくような指導方法の工夫をする。
- ・ 授業展開の中に既習の基礎・基本の繰り返し学習を意図的に取り入れた指導方法の工夫をする。
- ・ 現在でも、すでに朝の時間や休み時間後にショートの設定するなどしているのでも、引き続き、今後も、授業とショートの間との関連を十分に図っていく。

教育委員会では

- ・ 教科学習やショートの間・家庭学習等で身につけた自らの力を実感・評価でき、進んで学習しようとする意欲を引き出すことができる機会を設けていく。

○知識・技能を活用する能力を身につける（算数・数学B）

- ・ 小学校における「計算の仕方の工夫についての説明を読みとり、その考え方を別の計算に活用する方法を考えて説明する」といった設問においては、正答率が低い。
- ・ 中学校における「理由を説明する」といった設問については、無解答の生徒が多い傾向がある。
 - 授業の中で、正答を効率的に求めるだけでなく、思考過程をじっくりと表現したり、「どのように友達が考えたのか」、「なぜそう考えたのか」を読み取ったり、互いの考えを検討したりする授業展開を大切に、学びあいの質を高めていくことによって、活用能力の向上を図っていく。

学校では

- ・ 分析結果を踏まえて、校内研究等で算数・数学の学習指導法を工夫し、改善を図る
- ・ 保護者・地域に働きかけ、改善の趣旨が十分に理解され、協力が得られるように努める。

教育委員会では

- ・ 学びあいの質を高めるための指導の工夫がなされるように、指導法の研究を学校訪問の機会をとらえて継続的に指導していく。

各学校においては、児童・生徒の学力向上に向けて、指導内容や指導方法等の改善を図るとともに、児童・生徒が意欲をもって自ら主体的に学習に取り組んでいかれるような手立てを工夫していく必要がある。また、併せて、子どもたちの学習への意欲と基礎・基本の力を確実につけていく。

2 「児童質問紙調査」「生徒質問紙調査」の結果の分析及び今後の指導について

- ・ 今回の児童・生徒への「質問紙調査」については、小田原市が推進している「おだわらっ子の約束」の理念に一致するものが多く見られる。
- ・ 特に、「おだわらっ子の約束」推進の観点から、「質問紙調査」の結果を分析し、さらに、「教科に関する調査」の結果との相関関係について分析をおこなった。

- ・ 小田原市の大多数の児童・生徒は、基本的な生活習慣が身につけている。
 - ・ 朝食を毎日きちんととっている児童・生徒の割合は、全国平均を下回っていた。
 - ・ 起床時刻・就寝時刻等の生活リズムに関しても、就寝時刻が遅い傾向にある。
- 改善が必要な児童・生徒の割合がやや高い。

< 「質問紙調査」と「教科に関する調査結果」との相関関係 >

以下のような児童・生徒が国語、算数・数学のすべての調査において正答率が高い傾向が見られた。

- ・ 朝食を毎日食べている
- ・ 平日において、7時よりも前の時間帯に起床している
- ・ 勉強する時間やテレビやゲームをする時間などをきちんと決めている
- ・ 近所の人と会ったときにあいさつをしている
- ・ 学校のきまりを守っている
- ・ 友達との約束を守っている

従来から学力面と基本的な生活習慣等との関連性については言われてきており、今回の調査によって、全国的にも裏付けられた形となったといえる。

市内の結果においても「おだわらっ子の約束」がきちんと守れている児童・生徒が教科の調査において高い正答率を得られる傾向が見られた。

< その他の項目から >

中学生の「質問紙調査」結果からは

「人が困っているときは、進んで助けている」「人の気持ちが分かる人間になりたいと思う」などの問いに、肯定的な回答をしている市内の生徒の割合は、全国平均を上回っており、子どもたちに、他者を大切にす
る気持ちが育ってきているものと考えられる。

→ 「確かな学力」の確実な定着とともに、引き続き、「おだわらっ子の約束」の理念でもある豊かな
心の育成も大切な視点として今後の教育を推進していきたい。

今回の調査結果からも、今後、学力の向上や豊かな心の育成に向けて、「おだわらっ子の約束」の理念を家
庭・地域から着実に浸透させていくことが大切であると言える。